

鳥取市国府町西浦山古墳の出土資料について

東方 仁史

〒680-0011 鳥取市東町2-124 鳥取県立博物館

E-mail: higashikata-hi@pref.tottori.jp

[受領 Received 5 February 2006 / 受理 Accepted 28 February 2006]

A study on artifacts of the Nishiurayama Tumulus, Kokufu-cho, Tottori, Japan

Hitoshi HIGASHIKATA

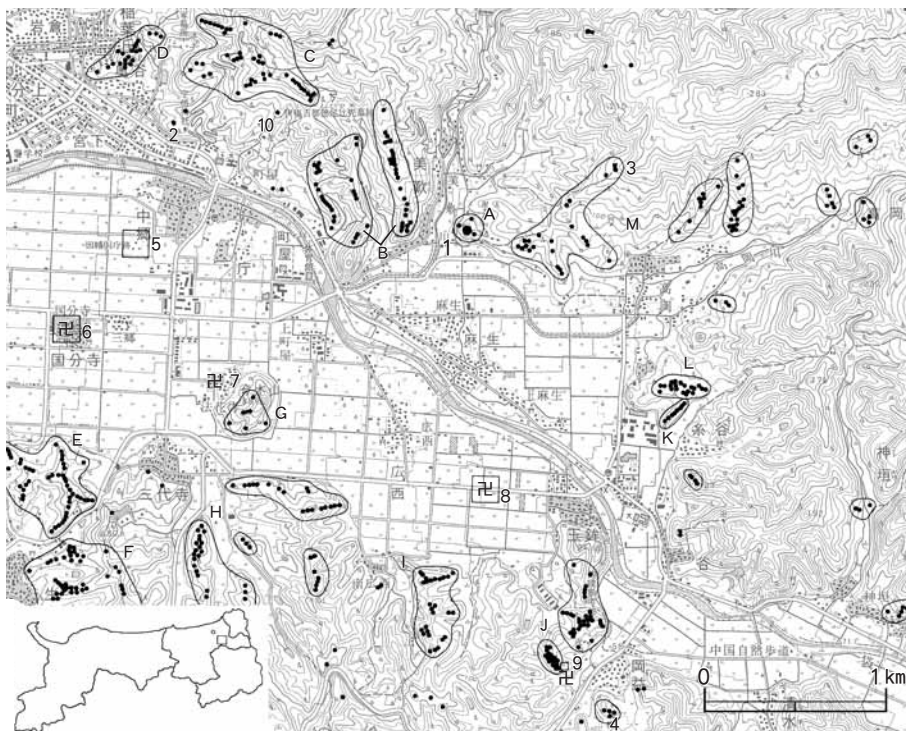
Tottori Prefectural Museum, Higashi-machi 2-124, Tottori, 680-0011 Japan.

はじめに

鳥取県立博物館の歴史民俗常設展示室には、鳥取県内の主な古墳出土資料が展示されている。その中に、西浦山古墳出土の筒形銅器が存在する。県内では他に鳥取市生山29号墳で出土が知られるのみで、山陰地方でも3古墳4例のみという出土が限られた資料である。鳥取県の古墳時代を考える上で欠かせない貴重な資料であり、論文等で言及されよく知られている。しかし、

筒形銅器以外の西浦山古墳出土資料については実測図等が公表されておらず、存在もあまり知られていない。出土状況・出土古墳がよくわからないこともあり、資料の具体的な検討がなされないままになっている。

本論文では、西浦山古墳から出土した資料について、それぞれ時期等の検討を行う。また、新たな資料から、西浦山古墳自体についても検討を加える。そして、西浦山古墳の時期・性格、鳥取平野における位置づけ等について考察していく。



- 1 西浦山古墳 2 亀金丘(宮下46号)古墳 3 高岡30号墳 4 梶山古墳 5 因幡国庁 6 因幡国分寺
- 7 因幡国分尼寺 8 玉鉾・等ヶ坪廃寺 9 岡益廃寺・岡益石堂 10 伊福吉部徳足比売墓
- A 西浦山古墳群 B 美敷古墳群 C 宮下古墳群 D 奥谷古墳群 E 津ノ井古墳群 F 生山古墳群
- G 今木山古墳群 H 三代寺古墳群 I 南広西古墳群 J 岡益古墳群 K 糸谷古墳群 L 森原古墳群
- M 高岡古墳群

図1 西浦山古墳周辺の地図

1 古墳の位置、周辺の環境

「西浦山古墳」は鳥取平野の東端、鳥取市国府町美敷に所在する。美敷集落の東側、四等三角点が存在する小丘陵上(標高63.8m)に位置する(図1)。この小丘陵は東方のみが尾根で東の山稜とつながるが、尾根があまり高くないため、半独立丘陵的な様相を呈する。頂上からは袋川の支流美敷川(西側)、高岡川(南側)の合流点を南西にのぞみ、その先には袋川や鳥取平野東部(法美平野)を一望できる。丘陵斜面はおもに急斜面で構成されており、やや緩やかな南西部分を中心に現在は墓地に利用されている。平野部からの比高は30m程度である。

東側丘陵には、旧国府町域で最大規模の前方後円墳である高岡30

号墳（全長59m）を含む高岡古墳群が存在する。また、美歎川を挟んだ西側丘陵に、美歎、宮下古墳群などが分布する。さらに、平野を見下ろす周辺の丘陵上には、東方に糸谷古墳群、袋川を挟んだ対岸に三代寺、広西、岡益古墳群など、多数の古墳が築かれている¹⁾。鳥取平野周辺の丘陵上には多数の古墳が築造されるが、その中でも有数の古墳密集地といえる。古代の遺跡も多く、北西1.2kmには青銅製骨臓器が出土した伊福吉部徳足比売墓が営まれる。また、袋川左岸には玉鉢・等ヶ坪廃寺や岡益廃寺、岡益の石堂などが存在する。さらに、因幡国庁、国分寺・国分尼寺が営まれた地にもほど近く、この周辺が古代因幡の中心地であったことが窺える。

旧国府町が作成した遺跡分布図（国府町教委 2001）には、西浦山古墳が位置する丘陵に3基の古墳と1基の消滅古墳が記されている。現存する古墳は、西浦山1号墳～3号墳と名付けられている。西浦山1号墳は「姫塚」とも呼ばれ、江戸時代の地誌『因幡志』（安陪1795）にも記載されるなど古くから知られる。墳丘はほとんど残存していないため、墳形・規模等は不明である。現在は凝灰岩の大型石材が残るのみで、この石材を削り抜いて槽状の部分を作り出している。これを屍床と考える説もあり、終末期古墳の埋葬施設と推定されている（川上1968）。丘陵頂上に存在する消滅古墳が、今回紹介する「西浦山古墳」にあたる。

2 西浦山古墳出土資料について

I 出土の経緯

本稿で紹介する資料は、昭和39（1964）年に、丘陵頂上が集落の子ども遊園地を作るため削平された際出土したものである（亀井1964, 1972）。出土したのは

筒形銅器のほか鉄製鋤鋤先、鉄鎌などで、直刀や土師器片も一緒に出土した。また、当時の新聞報道²⁾によると、工事の際に石棺が見つかり、その中から経筒や鋤先などが見つかったようである。その他、鳥取県史（鳥取県1972）などいくつかの文献に西浦山古墳に関する記述が見られるものの、資料や出土状況に関するこれ以上の情報は認められない。遺物の詳細な出土状況、品目、数量などについては、残念ながら上記の文献の記述以上のことは不明である。

II 出土古墳について

これまで、西浦山古墳群自体についても、出土資料と同じくほとんど記録がない状態であった。しかし、幸いなことに、古墳が削平される前に地元の郷土史家故川上貞夫氏が踏査しており、平成16年度に当館に寄贈された調査資料中にその記録が存在している（図2-1）。それによると、丘陵頂部中央にやや大型の円墳〔主墳〕があり、それを取り巻くようにしてやや小型の円墳〔陪墳〕が4基存在したことが窺える。また、丘陵南西斜面にも小型の円墳が2基存在する。このうちの1基が、1955年に大村雅夫氏らによって調査されている（大村1956）。これは、箱式石棺を埋葬施設とするもので、棺内から鉄鎌、刀子、ガラス小玉と人骨が、棺外から須恵器高杯が出土している³⁾。須恵器の型式から、古墳時代後期中葉の古墳と考えられる。なお、この調査内容は図2-1にも記載されている。

また、筒形銅器などとは別に、川上氏などにより西浦山古墳から採集された須恵器も当館に収蔵されている。須恵器が採集されたのは昭和31（1956）年で、大村氏らによる古墳調査の翌年である。このうち、完形に近い壺や甕の大型の破片には、採集日と採集場所が図入りで注記されている（図2-2）。内容は図2-



図2-1 川上貞夫氏による記録

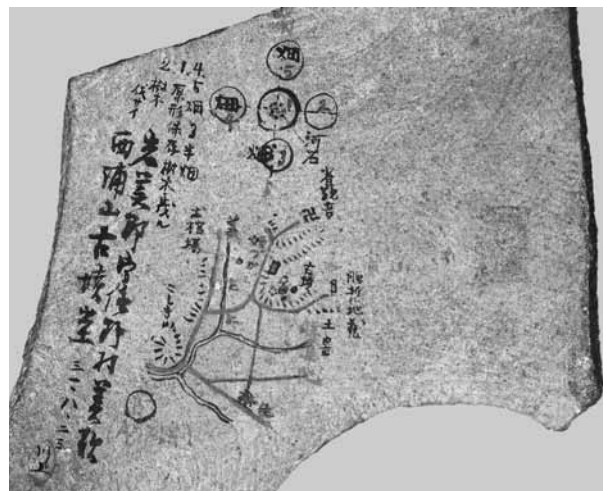


図2-2 須恵器の注記

1 とほとんど同じであるが、中央の円墳には墳丘中央に「河石」と注記されており、埋葬施設に関わるものの可能性があり注目される。

図2から、丘陵頂上に5基、南西斜面に2基が少なくとも存在したことが読みとれる。現在確認されているものも含め、当丘陵には10基程度の古墳が存在していたと考えられる。数基はかろうじて残存したものの、他は遊園建設の際に全て削平されてしまったようである。

当館所蔵の資料がどの古墳から出土したものは、遺物自体に注記されている須恵器を除き不明である。その他の資料が単一の古墳から出土したものか、複数の古墳から出土したものは確認できないため、本来は『西浦山古墳「群」』出土資料とするのが適当である。しかし、これまでに「西浦山古墳」出土資料として筒形銅器、鋤鋤先などが知られていることもあり、本稿では従来通り「西浦山古墳」として記述していく。

3 資料の概要

当館が所蔵する西浦山古墳出土資料は表1の通りである。出土の経緯でも触れた、経筒など、経塚に関係する資料も存在するが、明らかに経塚に伴うと考えられるこれらの資料は本稿では扱わない。また、「土師器片」は弥生土器片⁴⁾であり、今回は検討の対象としない。この他、「西浦山」と記入した小紙片とともにあった片刃鎌と刀子1点ずつが存在するが、西浦山に関する文献に全く記述がないことと、他の西浦山古墳出土品と残存状況が異なることから、混入の可能性を考えて今回の検討の対象から外している。

表1. 西浦山古墳出土資料

資料名	点数	出土年月
筒形銅器	1	昭和39年3月
鉄刀	1	"
鉄剣	2	"
鉄鎌	19	"
鉄斧	1	"
鉄製鋤鋤先	1	"
須恵器甕	1	昭和31年8月
須恵器壺	1	"
須恵器甕	1	"
須恵器片	一括	"

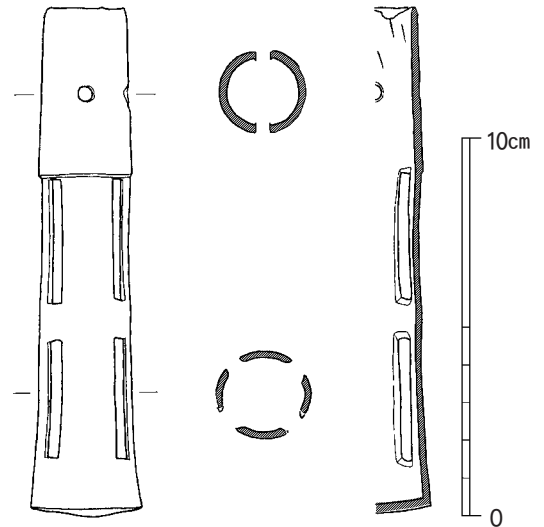


図3 実測図1 (筒形銅器)

筒形銅器 (図3)

口縁部を一部欠損するが、ほぼ完形である。外面は一部本来の面が残るものの、大半は腐食し緑白色の粉状の錆に覆われている。口縁部端や透かしの縁部も、腐食により丸くなっている。

全体の形状は、口縁部から閉じた底部に向かって外反する。口縁部から4.4cmの範囲が1段高くなっており、ほぼ中央に目釘孔が2ヵ所、対向する位置に開口する。孔の端面はほぼ垂直である。体部には2段に透かしを配する。透かしはいずれも長さ3.2cm、幅0.6cm程度の長方形で、4方向に開口する。目釘孔と透かしの開口方向は45°ずれており、一致しない。なお、透かしの存在する部分は、内面側に若干ひしゃげている。底部は0.2cm程度突出するが、最大突出部は底面中央ではなく若干ずれている。底部の厚みは0.25cmと、体部に比べて厚い⁵⁾。

外面は残存状況が良くないため、製作に関わる痕跡は確認できない。内面では製作技法に関する痕跡が良好に残存する⁶⁾ (岩本 2005)。まず、目釘孔であるが、縁が0.5~1.0mm程度内側に突出しているのが観察できる。これは、铸造の際の鑄張りと考えられる。透かしの周縁についても、残存状況が良くないが、わずかに縁部が残る箇所では鑄張りが認められる。また、同部分の断面を見ると、端面が内面に向かって傾斜しているのが確認できる。内面側は鈍角となっており、丸みをもっている。その他、内面の口縁部付近に、長さ0.5cm程度の斜め方向の傷が数箇所ついている。製作時もしくは使用時についたものと考えられる。

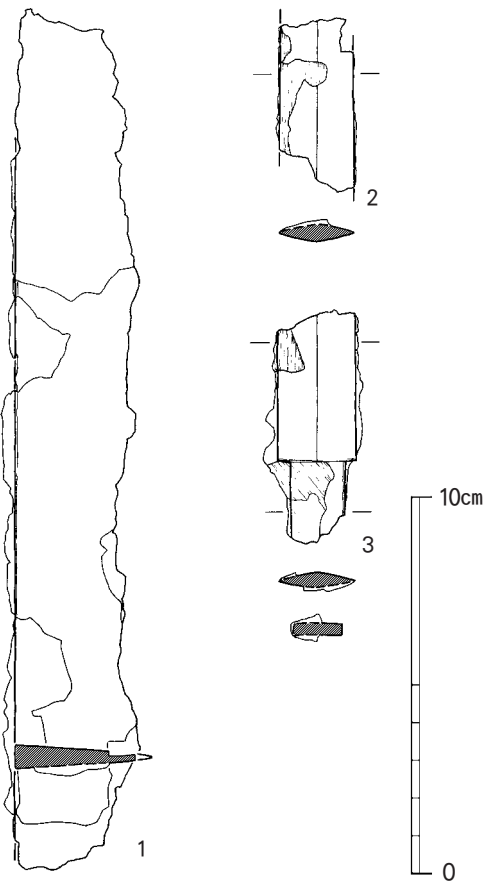


図4 実測図2 (刀剣)

鉄刀 (図4-1)

刀身部のみの破片である。錆により層状に剥離しており、刃側は元々の部分が存在しない。また、破損がひどいため、いずれが茎側であるかは不明である。刀身は平造りで、幅は復原すると3.6cm程度になる。

鉄剣 (図4-2, 3)

2は剣身部の破片である。幅は1.9cmで、片面に鞘の木質が残る。明瞭な鑄を有し、断面形は菱形を呈する。3は剣身部～茎部にかけての破片。剣身部の幅・厚は2とほぼ等しいため、同一個体の可能性がある。剣身部は鑄を有し、断面は菱形を呈する。関部は直角関である。刃部に鞘の木質が残るほか、茎部にも木質が残る。茎部の木質は関側を中心に斜め方向に残っており、柄もしくは柄縁装具の痕跡と考えられる。

鉄鏃 (図5)

ほとんどは破損しているが、鏃身部17本、茎部のみ2本、合計19本を数える。

1～13は柳葉形鏃である。破損しており、完形品はない。いずれも、鏃身部が関近くでくびれ、鏃身関が撫角(山形突起)となり、明瞭な頸部関を持たない。

1は、鏃身部のくびれがあまり大きくなく、鏃身部関

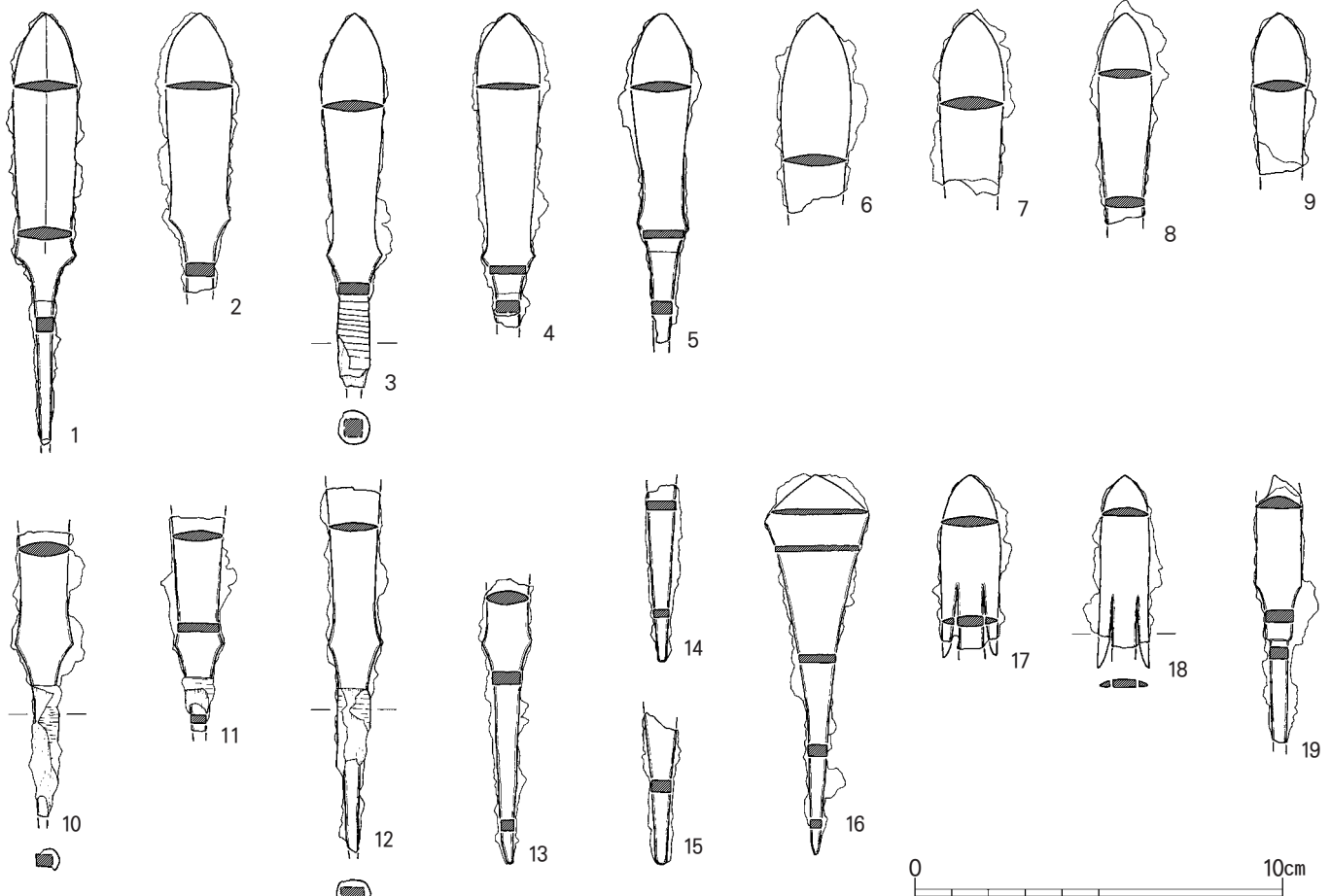


図5 実測図3 (鉄鏃)

はやや深く切れ込む。鎌身部は鑄を有し、断面は菱形を呈する。茎部は他の個体に比べて細く、断面が正方形である。2～13は、鎌身部断面が薄い凸レンズ状、頸部断面は長方形となる。鎌身部のくびれが大きい、2はくびれが小さく鎌身部長も短い。鎌身部が完存するのは4点であるが、鎌身部長が5.6cm～6.6cm、最大幅1.6cm～1.8cmと法量にばらつきがある。鎌身部全体に刃がつけられているものと、くびれ部付近から刃がつけられないものが存在する。3は茎部に矢柄を固定する樹皮が残っており、鎌身部側から矢柄に向かって巻いている状況が良好に観察できる。14、15は茎部の破片。断面長方形の形状から、柳葉形鎌の茎部片と考えられる。鎌身部のみの個体と同一である可能性はあるが、接合しない。

16は圭頭鎌である。一部銹で表面が剥離するが完形品である。鎌身部先端は角度が鈍く、わずかにフクラを有する。鎌身部先端で厚さ0.15cmと薄い造りである。側辺はやや内湾し、関をもたず茎部にそのままつながる。茎部の断面は長方形である。

17、18は腸袂柳葉鎌である。ともに砲弾形の鎌身部に長めの逆刺がつくが、逆刺の先端と頸部以下を欠く。17の鎌身部側辺はフクラを有し、鎌身部断面は両丸造りである。18は側辺がほぼ平行かつ17に比べ細身で鎌身部長もやや長い。鎌身部断面は片丸造りである。

19は短頸鎌である。鎌身部と茎部の先端を欠く。鎌身部の側辺は平行にのび、残存部分において先端に向かって極端に幅を減じる状況は確認できない。鎌身部は長三角形と推定でき、少なくとも長さ4cm以上と考えられる。鎌身部関は撫角、頸部関は直角関である。頸部は1.5cmと短い。鎌身部断面は片丸造り、頸部断面は長方形である。

鉄斧 (図6-1)

袋部を持つ有肩鉄斧である。ほぼ完形であるが、銹化が激しく刃部を中心に層状に剥離する。さらに、保存処理の際にこの剥離した隙間を樹脂で充填しており、元々の外形がわかりにくくなっている。

刃部の平面形はほぼ正方形に近いが、刃先側がわずかに広い。刃先中央が若干出っ張り、緩やかなカーブを描く。肩部は直角である。刃部の横断面は、中央が厚く端に行くに従い薄くなるよう作られている。袋部は下開きの形状で、横断面は楕円形を呈する。袋部折り返しは一方が直線ではなく弧を描き、刃部側は密着しない。また、基部側でも角がずれており、基部のラインは斜めになっている。縦断面は袋部折り返しが刃部側で密着しないこともあり、左右対称とはならない。

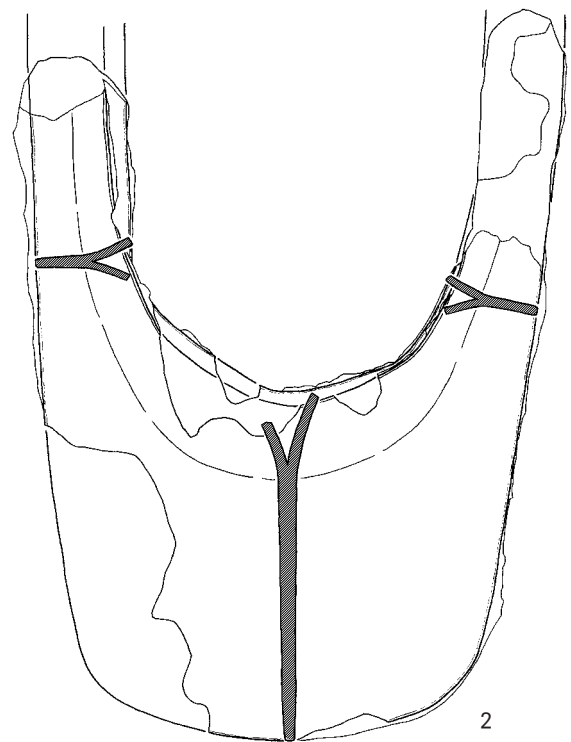
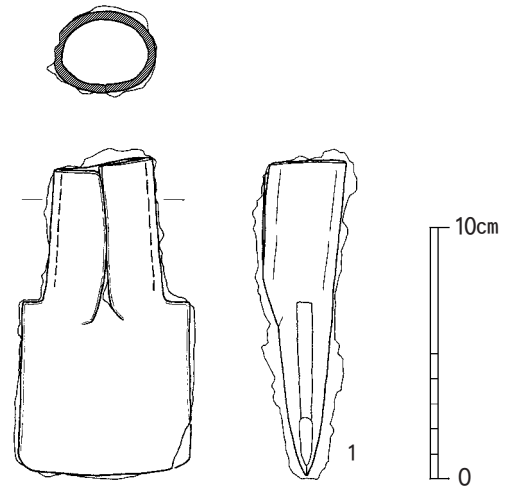


図6 実測図4 (鉄斧, 鉄製鍔)

袋部内面に木質は認められない。

鉄製鍔 (図6-2)

いわゆるU字形鍔である。銹化が激しく、全体的に層状に剥離しているほか、刃先の片側と耳部の一方を欠損する。また、現状で長く残存しているもう一方の耳部も、端部が生きていない。本来はもう少し長かったとみられ、全長30cm以上になる可能性が高い。保存処理により欠損部分が樹脂で製作され、剥離した隙間にも樹脂が充填される。鉄斧同様、残存部分の形状がわかりにくい。

全体的な形状はU字形を呈する。内側はカーブを描

きU字に近いが、外側は側辺が直線的で刃先の両端がやや角張る。刃先長が全長の半分近くを占める。刃先先端のわずかな残存部からは、刃が付けられているかどうかは確認できない。内側は幅2cm程度の溝が存在する。内部は錆や土で埋まっている。

須恵器 (図7)

器種が判明するものとして、甗、壺、甕、杯などがある。ほとんどが破片となっており、形がわかるものを中心に図化した。

1は甗。口縁部を欠くが、頸部以下は完形である。胴部は肩が張ったやや扁平な形状で、最大径となる部分に径1.4cmの穿孔がなされる。孔と同じ高さに、櫛描波状文が巡る。この波状文は、見目で右から左に施される。波状文の上下には凹線があり、波状文は凹線の後に引かれる。胴部外面下半はケズリの後、不定方向のナデで調整される。頸部は胴部に比べて細く、

短くやや外傾する。外面に櫛描波状文が巡る。頸部から口縁部への屈曲部では、内面に平坦面がみられる。焼成は良好であるが、底部はやや軟質である。

2は壺の口縁部。口縁部は短く、頸部から直線的に外反する。口縁端部は外方につまみ出し、上面に面を持つ。体部は残りが悪いが、外面に平行タタキが、内面上端には同心円当て具痕がわずかに残る。焼成は良好であるが、表面が荒れている。

3は大型の甕である。口縁部から肩部にかけてと、体部下半の破片が存在する。頸部付近は残存状況がよく、3/4程度残存するが、口縁端部は欠損する。口径22cm、高さ60cm程度に復原できる。口縁部外面には2段にわたって櫛描波状文が施される。波状文間には突線や凹線などは見られない。体部外面は格子叩き、内面は同心円当て具痕が残る。内面の当て具痕は上からナデが施され、凹凸がかなり薄くなっている。焼成は良好で、肩部は自然釉をかぶっている。胎土は緻密

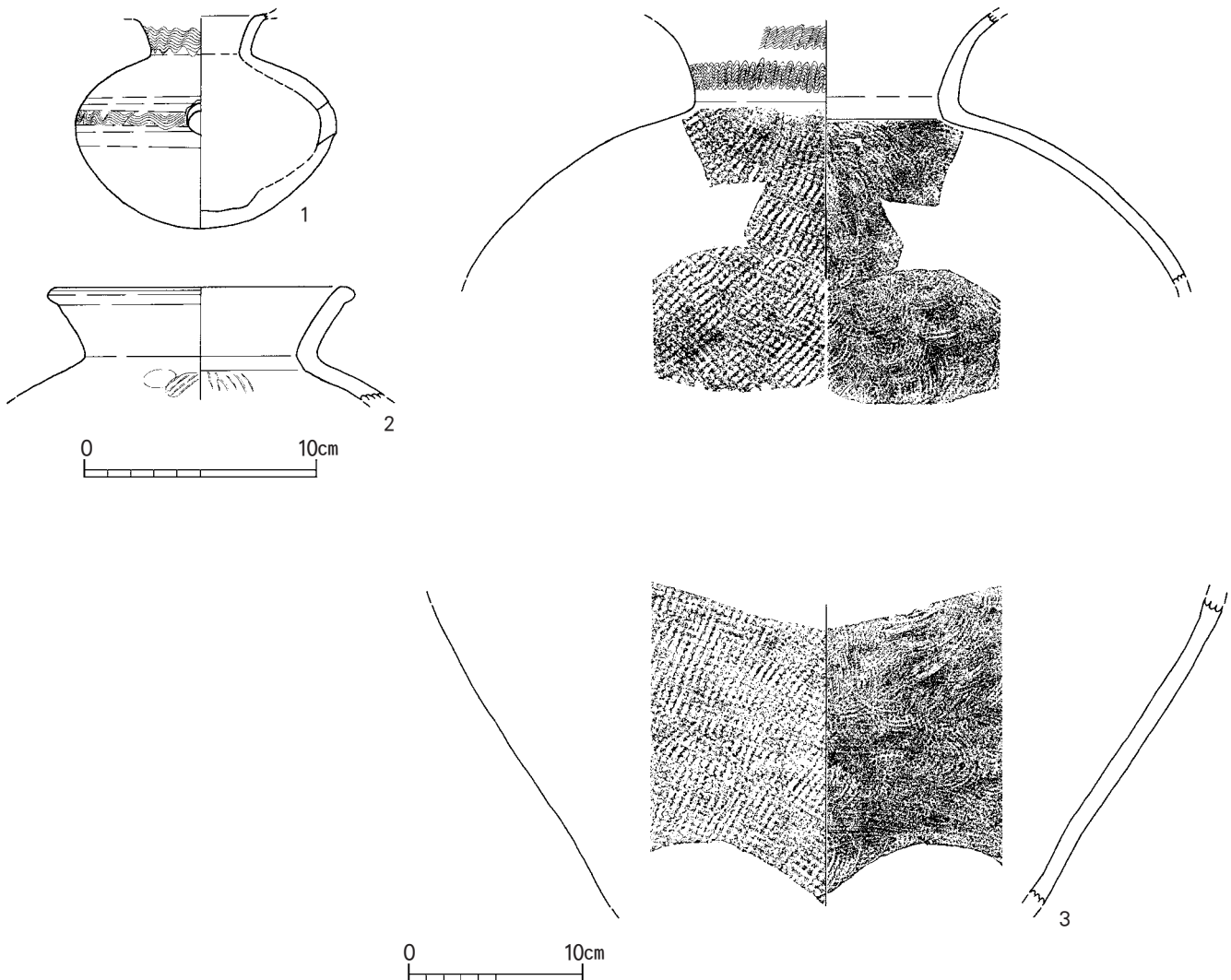


図7 実測図5 (須恵器)

なものをを用いている。

4 考察

I 資料の検討

西浦山古墳出土資料について、それぞれ県内の類例などを見ながら検討を加える。資料のうち、損壊が甚だしい鉄刀と小片の鉄剣については、情報量が少ないため検討の対象から外す。

筒形銅器

筒形銅器は、節帯の数や有無等によって分類できる。本例は、縁部が1段高い他に節帯は存在せず、2段に4ヵ所の透かしが存在するもので、山田氏の分類でⅢ類にあたる(山田 2000)。筒形銅器は、槍など長柄の武器の石突として使われた可能性が高く、中に小棒を入れて音響を期待するものでもあったと考えられる。

筒形銅器が副葬された古墳は、おおむね前期後葉から中期前葉に位置づけられ、革綴短甲との共伴例が多いことなどが指摘されている(田中 1998)。

山陰では本例の他2古墳から筒形銅器が見つまっている。県内では、鳥取市生山29号墳で筒形銅器1点が出土している。古墳は一辺20m程度の方墳と見られ、前期末頃の築造と考えられる。島根県では、出雲市山地古墳から2点出土している。古墳は径25mの円墳であり、共伴した銅鏡などから前期末頃の築造と考えられる。

本例を含め、山陰における筒形銅器の出土例を見ると、規模がさほど大きくない、しかも前方後円墳ではなく円墳や方墳から見ついているのが注目される。全国的に見ても、筒形銅器は大阪府紫金山古墳や岡山県金蔵山古墳など、大型前方後円墳や地域の首長墳と考えられる古墳から出土する一方、中小規模の円墳・方墳から出土する例も多い。

前期後葉から中期にかけての時期に、中央政権内部で勢力交替があったことが副葬品の種類や古墳の分布などから推定されている。筒形銅器が副葬される古墳はそうした時期に築造されたもので、中央政権内における新興勢力との関係が深いと考えられる。本例を含めた、中小の筒形銅器出土古墳の被葬者は、政権内の新興勢力と連携を持った、地域の新興勢力の一端を担った有力層、と想定できる(福永 2005)。

鉄 鏃

鉄鏃は、少なくとも17点の存在が確認できる。内訳は、柳葉形鏃13点、圭頭鏃1点、腸袂柳葉形鏃2点、

短頸三角形鏃1点である。

柳葉形鏃は「鳥舌鏃」とも呼ばれる形態である。本例では、鏃身部の幅が幅広でくびれが小さいもの(1, 2)と、やや細身の一群(3~5)、細身で長い一群(8, 9)が存在する。時期が下るにつれ鏃身部が伸長化する(鈴木 2003)ことから、鉄鏃の時期を知る手がかりとなる⁷⁾。鳥舌鏃は県内でほとんど見つかっておらず、これほどのまとまった出土量は県内で他に類例がない。また、鉄鏃17点という数量も、県東部の古墳時代中期の古墳としては多い。鳥舌鏃は近畿地方中枢部の有力古墳から普遍的に出土するほか甲冑との共伴例も多く、中央政権が積極的に配布した可能性が高い資料であり(鈴木 2003)、被葬者像を考えるうえで注目される。

また、短頸鏃も注目できる。短頸鏃については、朝鮮半島の鉄鏃との関連が考えられる(水野 2003)。副葬形態や法量の差などから、配布されたものと言うよりもむしろ、地域首長間の交流を通じて朝鮮半島から搬入されたものが含まれると評価される(鈴木 2003)。本例は鏃身部に比べ頸部が半分以下と短いことから、型式学的に古い様相が認められる。

鉄鏃の時期は、鳥舌鏃に伸長化したものも見られること、短頸鏃の鏃身に比べ頸部が短いこと等から、同一古墳から出土したとすれば、鈴木氏の編年でⅡ期、中期前葉にあたる。

鉄 斧

鉄斧は、刃部の平面形がほぼ正方形に近く、肩部を直角に造り出している。また、袋部折り返しが刃部側で密着せず縦断面が左右非対称である。さらに、端部も段差があるなど粗雑な作りであることから、Ⅱ'式(野島 1995)の範疇に入れるのが妥当であろう。全国的に多くの古墳における出土例があり、近くでは鳥取市里仁33号墳でⅡ'式が出土している。Ⅱ式、Ⅱ'式ともに4世紀後葉から5世紀前葉を中心とする時期に見られる。

製作技法については、X線写真などから、袋部を鍛打によって薄く羽根状に叩き延ばし、折り曲げて製作したのと考えられる(金田 1995)。

鋤 鋤 先

基本的にU字形であるが、大型で刃先が長いという特徴がある。古代のU字形鋤鋤先の分類で、A₃類にあたる(松井 1987)。

U字形鋤鋤先は古墳時代中期前半(5世紀初頭)に出現し、古墳時代を通して見られる。古墳時代のU字

形鋤鋤先は、耳部の幅と刃先の幅にほとんど差がない。本例のように刃先が長いA₃類は、古墳時代の資料としてはほとんど類例がない。A₃類は、倉吉市伯耆国庁跡（倉吉市教委 1976）で見つかったもののように、早くとも奈良時代になって出現したとされる。さらに、本例は復原すると長さ30cm以上、幅22cmにもなり、伯耆国庁例に近い法量となる。形態・法量の点から、本例を古墳時代のものとするには躊躇される。出土状況が全くわからないが、古墳時代以外の遺物が混入した可能性がある。

経筒や和鏡が出土したことから、西浦山古墳群の近辺に経塚が存在したことは確実である。経塚に鋤鋤先を埋納した例は寡聞にして知らないが、経塚造営に関わる資料である可能性も考えられる。いずれにしろ、古墳時代の資料として扱うには慎重にならざるを得ない。

須恵器

甗は、胴部がやや扁平で、最大径が中央よりも上部にあり、肩が張った形をとる。また、頸部が細く、短くやや外傾する形態、頸部から口縁部への屈曲が大きい等の特徴がある。底部はケズリの後ナデで調整される。こうした特徴から、陶邑編年のTK208段階併行に位置づけられる（田辺 1981）。なお、注記によれば、これらの須恵器は中央の古墳ではなく、その周囲に存在した古墳のうち南のものから見つかった。

鳥取平野では、TK208段階併行期の須恵器はほとんど出土していない。次のTK23～47段階であれば出土例は多く、古墳に限っても市内では杉崎18号墳、面影山7号墳などで出土している（谷口 1987）。また、古墳かどうか不明だが、西浦山古墳からほど近い高岡地区でも出土が知られる。しかしながら、TK208段階までさかのぼると考えられる古墳出土例は管見の限

り存在せず、本例は県東部出土資料の中でも最古の部類に位置づけられる。

II 築造時期

西浦山古墳出土資料については、時期がほぼ限定できる資料もあれば、存在する時期幅が広い資料もある。また、限定できる時期にも違いがある。しかし、南の古墳から見つかったことが明らかな須恵器と、古墳時代のものでない可能性があるU字形鋤鋤先を除くと、筒形銅器、鉄鎌、鉄斧は存在時期が重なるため、共伴した可能性は十分に考えられる。これらが単一の古墳から出土したものとすると、古墳時代中期前葉という時期が考えられる。

前述の川上氏による記録（図2）によれば、丘陵上の中央にやや大型の円墳、それを取り巻くように4基のやや小さな円墳が存在した。南の円墳から甗や甗などの須恵器が見つかり、古墳時代中期中～後葉の築造と考えられる。西浦山古墳群では、中央の円墳が丘陵の中央を占める立地とやや大型である点から、最初に築かれたものと考えられる。そして、周囲に継続して古墳が築かれた可能性が高い。その場合、筒形銅器、鉄鎌などは中央の古墳に副葬されたものという蓋然性が高いと考える。

III 西浦山古墳の位置づけ

西浦山古墳が存在する鳥取平野東部（法美平野）では、亀金丘（宮下46号）古墳（鳥取県 1972）や糸谷古墳群（松藤ほか 1994）などが前期古墳としてあげられる。亀金丘古墳は小型の竪穴式石室と考えられる埋葬施設を持ち、内部から銅鏡、刀剣、鉄鎌などが出土している。糸谷古墳群では弥生時代終末期の四隅突出型墳丘墓と、少し時間を置いて古墳時代前期に継続して築かれた古墳群が確認されている。いずれも平野

表2 鳥取平野における副葬品多量出土古墳一覧

古墳名	墳形	規模(m)	埋葬施設	副葬品	文献
西浦山	円		箱式石棺?	筒形銅器、鉄剣、鉄鎌、鉄斧	
亀金丘（宮下46号）	円?	14	竪穴式石室	銅鏡、鉄槍、鉄鎌、管玉	1
湯山6号	円	13	箱式石棺	三角板革綴短甲、小札鋳留眉庇付冑、鉄刀、鉄鎌、竪櫛	2
生山29号	方	17×15.5	竪穴式石室 +箱式石棺	筒形銅器、鉄刀、鉄剣、鉄槍、紡錘車形石製品、勾玉、管玉	3
里仁33号	方	14×12	木棺直葬	鉄剣、鉄鎌、刀子、鉄斧、針、方形鋤鋤先、曲刃鎌、鈍鑿、砥石、鑄造鉄斧（墳丘裾）	4
里仁35号	方	18×13.5	箱式石棺	鉄剣、曲刃鎌、鉄斧、刀子、針、竪櫛、管玉、ガラス玉	4
紙子谷1号	円	18.6	箱式石棺	鉄剣、鉄刀、鉄鎌、鉄鉾、石突、鈍	5
(参)古郡家1号3号棺	方円	90	箱式石棺	素文鏡、長方板革綴短甲、鉄剣、鉄鎌、刀子、錐、鈍、針、竪櫛	6

を見下ろす丘陵上に築かれた小規模な古墳である。西浦山古墳の立地は、こうした前期の古墳と共通する。しかし、亀金丘古墳が周囲の古墳と離れた位置にあることや、糸谷古墳群が前期のうちで築造が終わるのとは異なり、西浦山古墳では中期前葉から継続的に古墳が築かれた可能性が高い。ただし、周辺の多くの古墳の時期・内容は不明であるため、共通点と相違点を指摘するにとどめる。

少し地域を広げ、鳥取平野の前期～中期の古墳について見てみる。古墳時代前期中葉から中期初頭にかけて、鳥取平野南部には大型前方後円墳である六部山3号墳(63m)、古郡家1号墳(90m)が継続的に築かれており、因幡における前期の有力首長系譜と考えられる(君嶋 2005)。千代川左岸にも、時期は詳かではないが、里仁29号墳(82m)、桝間1号墳(92m)などの大型前方後円墳が存在する⁸⁾。

こうした首長墳と相前後する時期に、墳丘は小型ながら豊富な副葬品をもつ古墳が存在している(表2)。いずれも墳形は円墳または方墳で、大きくても20m程度である。これらの古墳は全てが同時期に存在したわけではなく、時期幅はあるものの、古墳の規模や埋葬施設に比べ、副葬品、特に鉄器の量が多いことが共通する特徴といえる。この中には、筒形銅器、二段逆刺鉄鎌、短甲のように、政権内の新興勢力との関連が深いものも存在する。前述のとおり、筒形銅器出土古墳のうち、中小規模古墳の被葬者は当時政権内において起こった勢力交替の中で、新興勢力側と連携を持った地域の新興勢力を支え、一端を担った有力層という推定ができる。二段逆刺鉄鎌や短甲もおおむね同様の位置づけが可能である。

もう一つ、興味深い事象が存在する。鳥取平野においては、平野を見下ろす丘陵上に小型の古墳が密集して築かれるという特徴がある。こうした群集する小古墳(「群集小墳」)は、近年の発掘調査により、古墳時代中期前葉になるとその数が減少することが指摘されている(谷口 2003)。これは、ちょうど大型前方後円墳が築かれる時期に当たる⁹⁾。群集小墳は、丘陵の尾根上に密集して築かれ、築造時期も近接している。中小の首長、およびその一族の累代の墓としての性格が強いものと考えられ、こうした中小の首長が大型前方後円墳を築いた首長を支えたことが推測できる。表2にあげた古墳の被葬者は、大型前方後円墳の被葬者を支え、対外交渉と勢力伸長の一翼を担っていたのではないだろうか。

西浦山古墳の存在する丘陵上には、前述のとおり古墳時代中期前葉から継続して古墳が築かれており、そ

の副葬品には、筒形銅器や鳥舌鎌といった中央政権内の新興勢力との関係を示す器物が含まれる。古墳時代前期後葉から中期前葉にかけての中央政権内の動きとリンクする、鳥取平野内における動きの中で、新たに力を持った勢力がこの西浦山古墳群を築いたものと考えられるのである。

おわりに

本論文では、県立博物館が所蔵する西浦山古墳出土資料について検討を行った。

結果的に、各資料の存続時期には差があり、全てを単一の古墳出土品とすることはできない。しかし、筒形銅器、鉄鎌や鉄斧などは、時期が概ね限定でき、不時の発見のため出土古墳の限定はすべくもないが、単一古墳の出土品とすることも可能である。本資料は、鳥取平野東部における、古墳時代中期の古墳出土資料として重要である。

近年、鳥取県内においては、道路などの開発に伴う発掘調査が大規模に行われ、古墳時代についても集落遺跡を中心に新たな事実が明らかとなってきている。しかし、こと古墳の調査に関しては、一部の地域を除き大きな進展は見られない。県内の古墳研究を進めるにあたっては、西浦山古墳出土資料のように、過去に出土した資料の資料化、情報の精査が必要である。

謝辞

資料のX線撮影については、鳥取県埋蔵文化財センター野田真弓氏に御協力いただいた。また、本稿を執筆するにあたり、下記の方々から資料および内容について御教示をいただいた。末筆ながら記して感謝申し上げます。

岩本崇、魚津知克、高田健一

註

- 1) ただし、これら法美平野の古墳を築いたであろう古墳時代の集落遺跡は、ほとんど明らかになっていない。
- 2) 産経新聞、昭和39年4月28日付けの記事による。なお、同記事には一度発見された遺物が手違いで再び埋められたり捨てられたりした後、その情報を聞いた当館(当時:県立科学博物館)学芸員が収集したという経緯も記載されている。
- 3) この古墳は「西浦山1号墳」とされ、出土人骨が新潟大学所蔵の「小片保山陰古人骨コレクション」の中に存在する(米子市史編さん協議会編1999『新修米子市史』第7巻資料編 考古)。なお、この「西浦山1号墳」は、遺跡分布図の「西浦山1号墳(姫塚)」ではなく、情報の統一

が必要である。

- 4) 弥生土器片は、鉄刀とともに西浦山と記入した紙片と一緒にあったもので、記述との整合性からこのとき出土したものと認識している。甕、鼓形器台、短頸壺、台付きの底部などがあり、因幡・伯耆の弥生土器編年でVI-1様式にあたる(清水真一 1992『因幡・伯耆』『弥生土器の様式と編年-山陰・山陽編-』)。古墳に伴うものでないことは明らかで、この丘陵上に弥生時代の遺跡も存在していた可能性が高い。
- 5) 筒形銅器のX線写真を見ると、目釘孔を垂直方向に置いた場合、片側半分(実測図では右側)がもう半分に比べ白く写っている。90°回転した状態では確認できないため、肉眼では判然としないが、目釘孔を軸線として左右で厚さが若干異なる可能性がある。
- 6) 筒形銅器の製作技法については、実際に本例を調査に来られた岩本崇氏から教示を受けている。
- 7) 他の例では、同一古墳でも法量に差があり、法量の差をもって一括の資料でないとする根拠にはならない。逆に、他の古墳例と法量に差があるということが共通することは注目できる。
- 8) 千代川左岸の大型前方後円墳については、鳥取平野南部とは異なる系譜を持つと考える説が有力である。しかし、因幡型円筒埴輪と呼ぶ、口縁が山陰型壺形土器と同じ形の円筒埴輪が、鳥取平野南部から千代川左岸まで見られることは注目できる。埴輪から見た鳥取平野の首長系譜の動向については、別に論じたい。
- 9) その一つである古郡家1号墳は、古墳時代前期末~中期初頭にかけて築かれたと考えられる。中心埋葬(1号槨)からは奈良県新沢500号墳と同形の八ッ手葉形青銅製品が、副次埋葬(3号槨)からは長方板革綴短甲、鉄鏃などが見つかっている。また、墳頂で見つかった入母屋造りの家形埴輪は、下屋根の降棟や上屋根と下屋根の境界に鱗飾りをつけるもので、他には奈良県室宮山古墳、寺口和田1号墳などで見つかっているのみである。畿内、特に大和盆地の西南部との深い関係を感じさせる。畿内の特定地域との関係といった点も今後の検討課題である。

引用文献

- 安陪恭庵(1795) 『因幡志』(『因伯叢書』第3冊所収)
 岩本 崇(2005) 「筒形銅器の製作技術」『紫金山古墳の研究』
 大村雅夫(1956) 「因幡・西浦山1号墳」『ひすい』29
 金田善敬(1995) 「有袋鉄斧の製作技法の検討」『古代吉備』第17集
 亀井照人(1964) 「筒形銅器」『郷土と科学』第10巻1号

- 亀井照人(1972) 「鳥取県の経塚遺物」『鳥取県立科学博物館研究報告』第9号
 川上貞夫(1968) 『因幡のふるさと』
 君嶋俊行(2005) 「因幡・伯耆における首長墳の消長」『前半期の首長墳の消長』第10回中国・四国前方後円墳研究会
 倉吉市教育委員会(1976) 『伯耆国庁跡発掘調査概要(第3次)』
 国府町教育委員会(2001) 『町内遺跡発掘調査報告書』国府町文化財報告15
 鈴木一有(2003) 「中期古墳における副葬鏃の特質」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第11集
 鳥取県(1972) 『鳥取県史』第1巻 原始古代
 田中晋作(1998) 「筒形銅器について」『網干善教先生古希記念考古学論集』
 田辺昭三(1981) 『須恵器大成』
 谷口恭子(1987) 「鳥取県東部出土の須恵器-陶邑I期を中心として」『水曜考古』第12号
 谷口恭子編(2003) 『横枕古墳群II』
 福永伸哉(2005) 「筒形銅器・巴形銅器出土古墳の性格」『三角縁神獣鏡の研究』(福永伸哉1998「対半島交渉から見た古墳時代倭政権の性格」『青丘学術論集』第12集を加筆補訂)
 松藤和人・中野知照・木村有作・加藤謙(1994) 『糸谷古墳群』同志社大学文学部考古学調査報告第9冊
 野島 永(1995) 「古墳時代の有肩鉄斧をめぐって」『考古学研究』第41巻4号
 松井和幸(1987) 「日本古代の鉄製鋏先、鋤先」『考古学雑誌』第72巻 第3号
 水野敏典(2003) 「古墳時代中期における日韓鉄鏃の一樣相」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第11集
 山田良三(2000) 「筒形銅器の再考察1999」『考古学論攷』23

表2文献

- 1 国府町誌編さん・編集委員会編(1987) 『国府町誌』
- 2 福部村教育委員会(1978) 『湯山6号墳発掘調査報告書』
- 3 山陰考古学研究集会編(2002) 『山陰の前期古墳』
- 4 中原斉編(1985) 『里仁古墳群』鳥取県教育文化財団報告書18
- 5 野田久男・久保穰二郎(1985) 「紙子谷1号墳の遺物」『鳥取埋文ニュース』No.11
- 6 古郡家1号墳調査団「美和古墳群」『ひすい』85~100

付表 西浦山古墳遺物計測・観察表

(単位：cm・△：残存値)

挿図	資料名	全長	口径	底径	口縁部厚	筒部厚	底部厚	登録番号	備考
図3	筒形銅器	13.5	2.0	0.3	0.2	0.15	0.25	732 001	

挿図	資料名	全長	刃部長	刃部最大幅	刃部厚	茎部長	茎部最大幅	茎部厚	登録番号	備考
図4-1	鉄刀	20.9△		3.3△	0.6				725 019	破損ひどい
図4-2	鉄剣	4.6△		1.9	0.4				726 012	剣身部
図4-3	鉄剣	6.2△	4.0△	2.1△	0.4	1.2△	1.45△	0.35△	726 013	剣身～茎

挿図	資料名	型式	全長	鎌身部長	鎌身部最大幅	鎌身部厚	頸部長	頸部最大幅	頸部厚	茎部長	茎部最大幅	茎部厚	登録番号	枝番	備考
図5-1	鉄鎌	柳葉形	11.8△	6.6	1.9	0.25		1.65		5.2△		0.45	721 007	1	茎先端欠
図5-2	鉄鎌	柳葉形	7.6△	5.6	1.8	0.2		1.65		2.0△		0.38	721 007	3	茎先端欠
図5-3	鉄鎌	柳葉形	10.2△	6.5	1.7	0.25		1.5		3.6△		0.45	721 006	2	茎先端欠
図5-4	鉄鎌	柳葉形	8.6△	6.6	1.7	0.2		1.45		2.0△		0.3	721 007	4	茎先端欠
図5-5	鉄鎌	柳葉形	9.0△	5.7	1.6	0.2		1.35		3.3△		0.35	721 007	2	茎先端欠
図5-6	鉄鎌	柳葉形		5.4△	1.9								721 006	3	鎌身部のみ
図5-7	鉄鎌	柳葉形		4.9△	1.8								721 006	5	鎌身部のみ
図5-8	鉄鎌	柳葉形		5.7△	1.5								721 006	4	鎌身部のみ
図5-9	鉄鎌	柳葉形		4.4△	1.43								721 006	6	鎌身部のみ
図5-10	鉄鎌	柳葉形	7.8△	2.9△	1.4△	0.38		1.5		4.9△		0.3	721 006	8	鎌身部、茎欠
図5-11	鉄鎌	柳葉形	6.9△	3.55△	1.45△	0.3		1.25		3.35△		0.2	721 006	10	鎌身部、茎欠
図5-12	鉄鎌	柳葉形	10.0△	4.3△	1.45△	0.2		1.45		5.9△		0.35	721 006	7	鎌身部、茎欠
図5-13	鉄鎌	柳葉形	7.7△	1.7△	1.15△	0.4		1.35		6.0		0.3	721 006	9	鎌身部欠
図5-14	鉄鎌									4.8△	0.8	0.25	721 006	13	茎のみ
図5-15	鉄鎌									4.1△	0.85	0.3	721 006	14	茎のみ
図5-16	鉄鎌	圭頭	11.4			2.8	0.1					0.33	721 006	1	
図5-17	鉄鎌	腸扶柳葉形	4.8△	4.55△	1.65	0.25	1.8△	0.75					721 006	12	頸部欠
図5-18	鉄鎌	腸扶柳葉形	4.7△	4.6△	1.35	0.22	1.4△	0.65	0.25				721 006	15	頸部欠
図5-19	鉄鎌	短頸三角形	7.4△	3.05△	1.25	0.33	1.5	1.75	1.45	2.8△		0.35	721 006	11	鎌身部、茎欠

挿図	資料名	全長	刃部長	刃部最大幅	刃部最大厚	袋部長	袋部最大幅	袋部厚	登録番号	備考
図6-1	袋状鉄斧	12.5	6.9	6.7	2.1	5.6	4.8	0.3	702 004	刃部一部欠

挿図	資料名	型式	全長	刃先長	最大幅	刃先厚	耳部長	溝部幅	溝部長	登録番号	備考
図6-2	鍬鋤先	U字形	28.5△	13.8	21.5△	0.8	14.7△	2.0△	2.7	704 001	耳部先端欠

挿図	資料名	器種	器高	口径	最大径	胎土	色調	焼成	登録番号	備考
図7-1	須恵器	甗	9.2△		11.2	緻密	2.5Y4/1黄灰	良好	215 013	口縁部欠
図7-2	須恵器	壺	4.9△	11.9		やや密	2.5Y5/1黄灰	良好	212 071	口縁部のみ
図7-3	須恵器	甕	31.9△				5Y6/1灰	良好	211 001	肩部自然釉